

女をみ郎なへ花し塚づか〔志し水みづの南五町にあり〕人皇五十一代平城天皇の御時、小野をの、より頼風かせといふ優人男山の麓にすめり。京に女を

持て互に連理の契浅からざりしに、かの女八はたへ尋ゆきて、頼風よりが事をとふ。あたりのさがなきもの答て、此ほどは
じめたる女房ましますが其所へ行給ふといふ。女うらめしくおもひ胸せまり、遂に放生川ほうじやうがはの端に山吹かさねの衣ぬぎ捨、
身を投て空しくなる。其衣くちて女郎花生出たるとなり。頼風より此花の本に立よれば、女郎花の恨たる風情あり。頼風こ
れをあはれみて共に身を投て死けり。其所を涙川なみだがはといふ。放生川の上みなり。されば漢かんの何文がぶんが女の塚に女郎花の生け
るも出ひ出され、古今の序にも、男山をとこのむかしを思ひ出て、女郎花の一時をくねるとかけり。

古　　今　　女郎花うしと見つゝ、ぞゆきすぐるおとこ山にしたてりと思へば　　ふるのいまみち

哀なり 餓鬼にもならず 女郎花

班　　竹